

翻刻

古活字本『べんけいざうし』(下)

下 房 俊 一

前稿(本紀要第10号)に引き続き、『べんけいざうし巻下』を収める。翻刻の方針は、前稿の凡例にあげたとおりである。

なお、本書の書誌その他に関しては、「古活字本『べんけいざうし』について」(島大國文、6)に述べておいた。

翻刻

へんけいざうし巻下(題簽)

へんけいざうし巻下(内題)

其後弁慶、又しよしやへ参り、ほとけの御まへにて申やう、「此御寺やきたる事、わかなすわさなれ共、さしたるつみにてはよもあらし、こんりう申も又へんけいかれうけんなり、ふるき堂をあたらしく仕てまいらせ候へは、そくはくの御ほうこふそかし、されとも此へんけい、ざいほうをもたねは、ほうかには入かたし、もとよりあくきやうをこのむ身なれば、平家のさふらひとも朝恩てうおんにほこり、ますますむけんのことをまねく間、おさへてすゝめにいらすへ

し、かれらかたちを千ふりうはひとりて、くきの代に参らせん、ゑいさんの仏前ぶつぜんにてたまちつるちうたうかい（1オ）も、此たひはかりは御めんあるへし」といふて、らいはいしてけり。

其のち弁慶都にのほり、平家のさふらひ共の太刀をとりけるに、むねとの大名、その外、越中の前司盛俊、上総つまの悪七兵衛景清かけきよなどいふ、一人たうせんせんものともをゑらみてそとりける。へんけいとたれは誰もしらす、八尺はかりの法師の、かみはおつかみなるか、まかぶらたかくて、ほうほねあれたるか、京る中にて平家のさふらひ共のたちをとる事、たゝ事にあらずといひふるゝ。さういなく九百九十九ふり取て、いま一ふりかおさめなれば、おとにきくみなもとの九郎御曹司ごそうしのこかねつくりのたち、きゝこそおよひけれ、此よしつねと申は、こ左馬頭義朝さまたちよともの御（1ウ）子なり、ようせうよりくらまのてらにて、ひやうはうのひじゆつじゆつときはめたまひたる人そかし、いかにもしてこのたちをとらんとうかかふ所に、六月十五日の夜、月くまなかりしに、北野のしやたんにてゆきあふたり。弁慶べんいつもこのむしやうそくなれば、しろきかたひらに、かちんの直垂ひたれに、くろいとおとしのはらまき、雲にほうわふのさうのこて、びやくたんみかきのすねあてさし、くろかねにてすちかねをたてたるほうのともとをは、そめかわにてまかせ、ゆんてのわきにかひこうて、二王立にたつたりけり。たれをかたきとはなけれ共、東西とうざいをきつとにらめは、おそれぬものなし。さるほとに御さうしは、はなやかなる（2オ）ひたゝれに、其ころ都にはやりける六はらやうのゑほし、こかねつくりの御はかせめされ、しやたんにむかひ、ねんしゆしてこそをはしけれ。弁慶こかねつくりにめをかけて、あつはれ、此太刀をうはいとり、千ふりにたさはやと思ふか、まつしやたんのかたをふしおかみ、おほいらたかのしゆすとりたいし、たらに、しんこんとなへつゝ、さらぬやうにて御曹司ごそうしの御まへを一兩度とをり、三とめにくたんのほうにて、おとりあかつてちやうとうつ。御さうしめての御あしにて、弁慶かひちをちやうとけさせ給て、いつのまにかはぬきたまひけん、御はかせをふりあげ、うしろとひにゆんつえはかりとひのきて、「夜中の事（2ウ）なれば、

もし人たかひにや」とのたまへは、「おとこははやきものかな、人たかひなりとも、うたはなとかうたさらん」とて、うつてかゝる。たちにてはあわせたまはず、とひのき、とひちかひ、はしめの程はむしんにあひしらい給て、へんけいかひさふのはうを、すちかねひるまきかけて、二尺あまりきつておとし給へは、へんけいおほきにわらひて、「あつ、きれたり、太刀かな、よきたちをもちたるこくはしや殿かな、其儀ならはてなみのほとを見せん」とて、四しやく六すんのたちをするりとぬいて、すきまもなくきつたりけり。其時御さうし、へんけいなりとおほしめし、くひをうちおとさはやおほしめすが、あつたらものを、しはらく(3オ)たすけみんとて、御さうしはひやうほうのしゆつをとりにいたし、ひきやうじさいのふるまひなり。御はかせをもつて、弁慶がかしらのあたりを、てんくわうのことにひらめかし給へは、へんけいあきれて目をふさき、ほうせんとして立たるところを、太刀のむねにてかいなをちやうとうつて、たちをうはひとり、うしろへ二三けんほととひすきり、「あらにくの法師かふるまひや、ころものうへにかつちうをたいし、かゝる悪きやうをするこそきくはいなれ」とのたまへは、弁慶つぶやきけるやうは、「おほくの人と勝負をしけるに、此くはしやとのにあふて、ふかくをとるこそむねなれ」とて、たちすくんでそめたりける(3ウ)。御さうし、「此太刀ほしきか」と宣へは、「わか物なれはほしからては」と、りこんかほにそ申ける。「さらはとらするぞ」とて、はらまきのむないたをなして、なけつけたまへは、地にもおとさす中にてとり、やかてさやにおさめけり。このくはしやをみれば、具そくもきすすはたなり。心こそかうなりとも、我ちからにはおよはしとおもひ、「らびやくまん」といふまゝに、きうのてをひろけておとりかゝるところを、よしつね、弁慶かゆんでのわきを、うしろへつとぬけ給ふあひた、うしろを見れば人もなし。てんをかけるか地をくゝるかとおふしきにおもひて、あきれそたつたりける。しはらく心をつめてあなじけるか、当社(たう)は諸神(しよじん)(4オ)にこえて、れいちあらたにましますは、かりに人間とあらはれ、しやまん、かまんの悪心(あく)をいましめたまはんためのはかり事にてやあるらん、あらあり

かたの御事とて、しやたんにむかひらいし奉る。もとよりむさし、悪行あくのものなれとも、ないてん、けてんくらからす。法花きやうのひほをとき、しよほん第一よりけつくはんして、「自今以後、無理無たうの心もつへからす、けんせあんおん、ごしやうぜんしよ」とゑかふして、夜あけて北野を立出けるか、いつのまにかはだうしんさめ、さもあれ、すきしよの男は、神かほとけか何ものそ、もし此おとこにあふならば何とかすへし、百日のうちは、御神ゆるしたまふへし（4ウ）、百日か内にこのものにあふならば、ひつくみさしちかへてしぬへし、もしあはずは、衣のいろをも心をもふかくそめてごしやう善提ぼだいより外あるましと、又たちかへりてらいはいし、京のかたへそかへりける。

おなしき七月十四日の夜、いつものしやうそくにて、くたんのほうのきりのこしをゆんてにつき、法性寺しやうじょうのあたりをとをりければ、みたうの内に、誠まことにたへなるふえのね聞えける。弁慶たちより見ければ、くたんの人なり。しれものよとおもひて、まちかくたちより、なきなたの石つきにて御あしをつかんとし、あふきをもつて御くしをなて、ねすみなきしてとをりけり。御ざうしは御らんして、にくきものかなと（5オ）おほしめし、一町はかりやりすこし、あをめなる石のかとのあるにてうち給ふ。つぶてはてんくたうの物なれば、此石ひゝきわたりて、弁慶がちやうくにはたとあたりて、此いしみぢんにくたけたり。へんけい眼まなこくらみけれ共、ふんはり立すくみ、ほのねをくひしはりてそこらへける。其後へんけい、きをとりなをして申やう、「此くはしやはつふての上手かな、それかしかしやうとくかなかしらなればこそやふれされ、いてきはへんたうせん」とて、太刀をぬきてそかゝりける。御曹司ざうじ御らんして、「あまりに物あひちかし、こゝへく」とのたまひて、たうのもとおしさり給ふ。弁慶つゝいて、をかみうちにちやうとうつ。よし（5ウ）つねなにとかとひたまひけん、うしろとひにたうのうへまであかりたまひて、ますかたにこしをかけ、「御坊、心きしあらはこれへく」とおほせければ、弁慶みあけて、はらをたて、いよくたゝ者にてはなしとて、もとのやとへそかへりける。

そのち八月十七日の夜、ことさら月くまなかりしに、御きうしきよみつへさんけいしたまふ。むさしもいつものしやうそくにて、きよみつへ参りけるに、十七日の夜の事なれば、きせんくんじゆして、仏前ぶつぜんよりふたいさきまで、とうそく、なんによなみるたり。もとよりへんけい、人をひと共せされは、太刀のさや、なきなたのゑをふりまはせは、人おそれてをしける。しやうめんのか(6オ)うしきはまでやふり入けるか、おもてのひたりに一座せんと見るに、くたんのこくはしやとのまします。武蔵房むさしものおそろしきとおもふ事しらねとも、此人を見てむねうちさはきければ、ふかくなりとよ我こゝろとて、みつからむねうちさため、ましかくよりておもふやう、ほつたいとしておとこの下につかんとむねんなり、いかせんとおもひやすらへは、このどのはりやうかんとふさき、ねんしゆし、かつしやうしておはしければ、よきひまと思ひ、こわきをすくひなけんとして、両の手をさしよするところを、御ざうしみの御あしにて、弁慶かむないたをちやうとふみたまへは、うしろへとうとまるひけり。大の(6ウ)法師がはらまきなるものおほかりけり。へんけいおもふやう、あらはつかしや、これほとおほき人の中にて、かくふかくのありさまいかゝせん、とあんじけるか、しる人のていにもてなして、「殿はいまはしめぬあらさけふや」といひ、ちからなく下座につく。其後弁慶、御曹司ごそうじをはつたとにらみ、「や殿、ふつせん、しやたうにては法師こそ上座すれ、そくたいとして法しうへに給へは、じん儀にそむきたまふへし、ほうし入堂たくとみたまはく、ざをざりてしやうじ給ふへきを、あまつさへらうせきのふるまひかな」と(7オ)いへは、よしつねきこしめし、「このほうしはよく物をしりたるや、ほとけの御をしへのしやうそくをはしらすや、ころもをき、けさをかけたらは、座をざりてもおき申へきか、ほつたいかとみればかつちうをたいし、ふしきのくせものなり、追出おひだすへきに、みだうのうちにおぬにをくをまんそくせよ」と、にくく〜と宣ひて、又ねんしゆしてこそおはしけれ。さんけいの人々聞て、「そも此とのはいかなる人

やらん、鬼神おにのやうなるものを、あのことくにはおほせけるぞ、あらおそろしや」と申ければ、其なかにくらまのものゝありつるか、よく見しり奉り、「あれこそ源氏の大將しやうの御みぎょうし義経よしかねにたまはせ、かやうにあさく（7ウ）しく申もおほそれあり」と申せば、武蔵これを聞、扱あつかはうたかふ処なし、義経よしかねにてわたりたまふそとて、其時まじ弁慶べんけいひさを立、御まへにちかつき、こゝゑになりて申けるは、「それかしをはいかなるものとかおほしめす、さいたうの武蔵むさし坊弁慶ぼうべんけいと者ものなり、殿はこさまのかみ義朝よしかねの御子、九郎義経くわじやうよしかねにてわたらせたまふか」と申ければ、御みぎょうしきこしめし、「さては汝なんぢをこのほと何ものかとおもひ、きつてすてはやと思ひつるに、よくこそたすけをきたれ、扱あつかはへんけいといふものか」とて、わらひたまふ。そのときへんけい申けるは、「たひく御手みでなみのほとはみ奉れとも、ひきやうじざいのじゆつたうとおほえて、うちものゝ勝負せうぶ（8オ）つけかたし、去なから今一度参り相、せうふをけつし候はゞや」と申せば、「しさいあらし、たゞしたひく御へんはこのよしつねをけしやうしたまふほとに、此たひはよしつねかくひをおとさるゝか、御身みみがくびをはぬるか、一つの内にせうふすへし」とおほせければ、弁慶申やう、「それまではむやく、かち申たらは、源氏げんなりともむさしか郎等らうとうになりたまへ、わふそんちかきへんけいを、さけたまふへきにもあらず、又うちかたせたまはゞ、それかし御内にめしつかはれて、朝夕ほうこういたすへし」と申ければ、義経よしかねおほしめすやうは、とてもまげはせし、りやうじやうして、めしつかはんも一人たうせんたるへしとおほしめし（8ウ）、「さらはともかくもせうふをけつすへし、たゞしたうのうちあま一人目しかるへからす」とて、二人うちつれて、きよみつ坂さかをくたりたまひ、五条のはしにて、「此へんこそしかるへけれ」とて、八月十七日やはんはかりの事なるに、「源九郎義経つねね正年十九歳さい」と御名みなのりあつて、御はかせするりとぬきたまふ。弁慶も、「正ねん廿六」となりの、四尺六寸、するりとぬひてわたりあふ。くはんおん参りの上下、前後ぜんごのみちにたちとまり、「ふしきのけんふつあり」とて、きせんくんしゆしたりけり。たかひにてなみ見せんとて、うけつそむけつして、ひはなを

ちらしたまふ。へんけいははらまきにこ具そくはさしかためたり、たちのすんは(9才)のひたり、すきまもなくきつてかゝる。御さうしはずはたにて、てうとりのことくとひかけりたまふか、いつのまにかはむさし房かひさのくちをきり給へは、すこしりそく所を、さしよりてたちをうはひとり、うしろなるきしへとひあかり、「さてしうくのやくそくはいかに、むさし」と宣へは、弁慶いまはことはなくして、こうけんはきたる事なれば、ちからなく御まへにかしこまる。其ときよしつね、弁慶におほせけるは、「いかにむさし、我身こそあらめ、御へんさへ道せはきものとならん事のふひんさよ」とおほせければ、へんけい承て、「しうくのけいやく申うへは、其たんは心得て候、御身はあるにまかせてすませ給へ(9ウ)」とて、うちつれて京中をこそめぐりけれ。

よしつねにさいたうのむさしあひそうて、らくちうをめぐり、へいけをほろほさんとするよしふうふんしければ、入道相国は聞たまひて、「やすからぬ事かな、へいぢのらんちちうすへきこくはしやを、たすけおきたるかうおんをわすれ、かへつて此一もんをほろほさんたくみ、あまつさへ弁慶といふくせものをあひかたらうこそきくわいなれ、いかにもして此二人のものをからめてまいれ」とおほせける。さふらひともうけたまはつてねらいけれ共、ひやうはうのじゆつをきはめ、そのあり所をもしらせす、うつへきやうはなかりけり。一もんの人々、れうのひけをなて、と(10才)らの尾をふむこゝちして、ふつけい、しやさんもころやすくはしたまはず。いかゝしてこのものをうちとらんとせんきあるところに、ある人しやうかいの御まへにて申けるは、「この弁慶はゑいさんのさいたう、はゝきのりつし慶心のてしなり、此けいしんをめししたして、へんけいあり所をとせたまへ」と申ければ、「此儀しかるへし」と、やかてなんは、せのおに三百余騎相そへてそつかはされける。けいしんのはうを七へ八へにとりまはし、つかひたてゝ申けるは、「御てしのむさしはうといふ悪僧、九郎よしつねととうしんして、御一門にさまゝのあくきやくをなす、師弟の御事なれば、かのへんけいを(10ウ)たまはり六原へめしつれん」といふ。慶心きゝた

まひ、「是はおもひもよらぬ事にて候、其ものゝ事はここに候ひし時、一さんのせせうによつて此坊をはひらき、二三年此かたは行かたをしらす候」と申されければ、なんはの次ら申けるは、「さらはそのよし、六原にておほせわけられ候へ」といふ。「それはともかくも、我身にくもりあらはこそじたいにもおよふへけれ」とて、かうそめの衣に、おなし色のけさかけて、ぬりこしかくせて出られける。さるほどにむさしばうは、御曹司につき奉りて、北白河にゐたりしか、此事を聞て、御ざうしの御前にて、「われゆへに師しやう、六はらへまいられ候よし承候、十恩をうけなからかゝる(11オ)うきめをみせ申事、いんくはのほとあさましう候、御いとま給て平家のでにわたり、ししやうのなんかんをたすけ申へし」と申せば、義経御なみたをなかし給ひて、「ししやうの事なれば申もさる事なれとも、とかなきみなれば、さためてやかて登山あるへし、御へんか行ほとならば、きられん事は一ちやうなり、たゞまけてとゞまれかし」とのたまへは、弁慶かさねて申けるは、「たとひきられ候とも、たちまちにをんりやうとなつて、へいけの一もんをほろほし、けんじのしゆご神とならんことうたかひなし、いまたうんつき候はすは、おもしろく申ぬけ、やかて参るへし」とて出にけり。あとにとゞまるは(11ウ)三世のしゆくん、さきにすゝむは三世のししやう、いつれもおろかはなけれとも、一字千金のかうおんをほうせんと、さもあらけなきまなこよりなみたをなかしつゝ、六原さしていそきけるが、むかししたしかりし人、あんしつむすんでありけるをたつねゆき、「師しやうの慶心は、それかしゆへに六はらへたゞいま引立参りたるよし承候あひた、弁慶まかり出て、御房をはやかてきさんさせ申へし、此具そくをあつけ申候、むさし六はらにてしゝたると聞え候は、此鎧ともにて僧をもくやうしてたまはれ、もし又しなすは返したまはれ」といひすてゝいてけるか、へんけい其日のしやうそくには、かうそめの衣に(12オ)かちんのけさかけ、ときんまゆはんにせめこみ、黒はゝきさしはき、せのおかけいごして行、けいしんのこしをめかけてはしりけるか、ほとなく追つき、こしのなかゑにとり付て、大おんじやうにて、「そもく此けいしんはいつくへ行

給ふぞ」といへは、こしかき共、大のこゑにおそれてふるひく、「六原へ」といへは、「仏事か又はだうたうの御くやうの事ならば、大せいの軍兵にてはよもあらし、何事ぞ」とへは、りつし聞て、たれともしらす、「へんけいか事をたつねらるへきためぞ」と申されければ、「さらは老僧までもなし、弁慶とはわか事なり、何事を六はらにはたつぬへきためそや、むやくの老僧のくほんけの御(12ウ)しゆつしかな、いそいでききんしたまふへし」とて、こしをおしかへす。其とき慶心なみたをなかし、「とうきやうにて見つる後はいまこそはしめなれ、我事はとしより、よめいもいく程あらん、汝はわかき身なれば、しはらくしんみやうをつき、らうそうがほだいをとぶらひ給へ、とてもとかなき身なれば、平家へ申わくへし、これまてくたりたるうへはわれこそいつへけれ」と宣へはは、「其儀ならばけいこのふしとも一とふみころし、はらをきるへし、御きさん候は、なはをかけられ六はらへゆかん」とて、はかみをしてたちけるは、いかなる四天八てんのあらつくりといふ共これにはすきじ。其ときけいこのぶし申けるは(13オ)、「りつしの御下向も弁慶をたつねられん為なり、さいはいいてんとおほせ候うへは、けいしんはききさん候へ」とくちくんに申ければ、このうへはちからなしとて、こしをかきもとしける。その時むさし、師しやうにむかひ、なみたをなかし申やう、「此とし月は御ふけうのふんにて、朝夕此事をなけき存候、いまはこのあひたの御ふけふを御ゆるし候へ」と申せば、「いやくその儀なし、一さんのせせうなればちからなし、まつたくふけふとはおもはぬ」とて、ころもの袖をぬらされければ、弁慶も、「さては御かんだうにてはなかりしを、うらみ奉りし事こそかなしけれ」とてなきければ、見る人々、「あのおそろしき眼にもなみたはある(13ウ)か」と、あはれなからもおかしかりけり。扱りつしは山へのほり給ふ。へんけい何とか思けん、うちかたなをししやうにわたし、手をのへてなわをかくり、なこりをしけに見おくり、やすらひけるこそあはれなれ。そのちむさし申けるは、「わかきもの共かのりたる馬いたせ、わ殿はらか馬にけたてたるへきか」といへは、やかて馬引むけてうちのせて、さふらひともしきみきくめきかへ

りけり。弁慶是ほとのはなはならば、十すちなり共しめきり、本まふをたつすへきものをと思ひければ、あさわらひして六はらへ行けり。

へんけいをくして参りたるよし申ければ、清盛よろこひ給て、ていしやうのしらすへめさるゝ。一門みなく（14才）出あひ給ふ。さて武蔵にはむねとの大ちから十余人とりつき、「これは御前ぞ、かしこまれ」とて、ひきすへんとすれば、此ものともをひつたてゝ、二三けんさきへすゝみける。「是はうへの御まへぞ、御坊」といへは、「なに、うへとはたか事ぞ、桓武のすゑといへとも、わふそんはるかにへたりぬ、京わらんへともかたか平大とわらひし人、世に出てあきのかみといひしか、今うへさまといはるゝな、弁慶も天智てん皇の御末、すゝきたうのせうりう、熊野の別当弁心か子なれば、うちはます共おとるまし、誰におそれつくははん」といへは、きよもり大にいかり、「あの法師めを門外へひきたてよ」とおほせければ、「承候」とて、人々よつて（14ウ）ひけ共はたらかす。たゝ大木をひくことくなり。「あなおそろし、弁慶かちからのいみしさよ」とて、一もんの人々、其ほかさふらひとも、ひろゑんのおつるはかりにさはく。其時むさし、よきついでなり、一もんの名をとひ、よく見しり、かさねて行相たらん時、くひうちおとさん物と思ひければ、ここゑになつて申けるは、「あれにまします人々のなををしへよ、さあらはなんちらにひかれて、いつくまでもいてん」といへは、なはとりともよろこひ、こまつとのをはしめて、右大将宗盛、新中納言とももり、三位中将しげひら、平大納言時忠、三河守憲盛、三位通盛、のとのかみ憲経、くらんとの太夫なりもり以下の人々なり。さてさふらひ（15才）には越中せんじ盛俊、かつさの悪七兵衛景清以下のむねとの人々のけみやう、じつみやうををしへける。へんけい座しきをきつとみまはし、あつはれかたきや、のゝすゑ、山のおくにて、我君の御心にかけたまふ人々はこれそかし、これほとよきおりからに、此なはをしめきり、具そく一つはひとり、きよもりのくびのきりよけに見ゆるをうちおとし、其後小松殿そのほかの人々と勝負せはやおもひ、

すてになはをきらんとしけるか、又おもひ返して、とても一度はほろほすへきかたきなり、清盛父子のうち、御ざうしの御手にかけてくやおほしめすらんとおもひ、とかくしあんする処に、こまつ殿、「むさしか(15ウ)まなこつきは見所あり、若もの共ふかくすな、それほとのはをなにとおもはん、かなくさりなりとも引くるへききしよくをは、たれもみしりたまはぬか」とさゝやき申されければ、弁慶おほきにわらひ、「こゝにゐればこそ人々にまほられ候へ、いさをのく」とて、なはとりともをひきたてゝ、せのおかもとへ行ける。清盛此よし御らんして、「此法師に心をゆるし、ふかくをなすな」とて、はんをかたくおほせつけ、れんちうに入たまへは、つはもの共承て、門々をさしかため、けいごひまなくまはりけり。弁慶は「もとよりこくしやうせかい、なんなふにつなかれて、ねかへ共きたらす、いとへ共さるへからず、な無さんほう」とうちゑい(16オ)して、あさわらひしてゐたりけるか、しやうじをへたてゝ、わかさふらひとよりあひていひけるは、「おとにきく武藏坊かたつねいたされてきたりたるそや、一もんのくはほうかな、よしつねもいまのことくならば、やかてとらはるへしと思ふなり、さためてへんけいはさうなくよしつねのさいしよをはいふまし、さあらは火せめにすへきか、水せめにすへきか」とさゝやきけるを、武藏きゝて、あらかたはらいたの事共や、まことにとふへきならば、弁慶かちからは人にもあつてす、又おちもせねは、このなは引きりて、此いゑのけた、うつはりとりなをし、さうのわきにはさみ、むかふものをうちたをし、一とひに御曹司(16ウ)の御在所へ参らん事あんのうちなるへし、とおもひければ、「わとのはらたち、弁慶は字文、かつせん、いさかひ、すまふ、其外はやわさ、ちからわさもしつ、あたらぬ草きもなけれとも、いまだきうもんといふ事をしらす、きうもん、かうもんはにかきものか、あまき物か、ちと心みしたや」とて、大くちをあけてそわらひける。此よし相国へしかく申あければ、扱この法師めをなにかせんと、おほしめしわつらはせたまふ処に、吉内左衛門すゝみ出て申ける。「此弁慶はきうもんにては、いかにせめ候とも義経のさいしよをは申へからず、思ひきつてわれと

参る程のものかおち申事は候まし、それかしこの者をたはかり義経(17才)のあり所をよく聞て申上候はん」と申ければ、清盛もりきゝたまひ、「ともかくもはからへ、くんこうはのそみにたかへし」とおほせける。吉内左衛門心の内におもふやう、わかさいかくにて、とひおとさんはひつちやうなり、さあらはくはふんの御しよりやうたまはるへし、其とき人をもたてはかなふましと思ひ、「しかるへきものあらはふちすへし」と申ける心あてこそおかしけれ。

さる程にいろくくのさつしやうとゝのへたるなかひつかせて、瀬せの尾おか宿所しゆくにゆき、弁慶がゐたる座しきへ出、
「いかにむさし殿、われも人もしゆくんのためにいとまなし、御身のさならせ給ふも、しうのためならずや、とくにも参り(17ウ)とひなくさめ申さんを、たゝいま申ことくなり」とて、色いろさまくくのさつしやうとりいたし、へんけいにすゝめける。むさし、「此間は野山をすみかとしてしゆはんとをかりしに、これほとねんころなるもてなしありかたし、これもしゆくん師うししやのつこたふ為に身をかるんするゆへそ」とて、しゆはんをおもひのまゝにしたゝめける。吉内、時分はよきそと思ひ、くちひるくひしめし、うちくつろぎ、物いひよけにちかつきけり。へんけい申やう、「かゝる御心さし申につきなし、くけのましはりなき身にて、平家へいのさふらひたちを見しり申さす、誰人にてわたり候やらん」といへは、「吉内と申ものなり、人つてならず申度事ありて、これ(18才)まで参りて候、たゝしかやうのしだいを申せは、かへつてびろふにて候へとも、御房の御為にはかたのことくけしやくに付て、御一門のはしにて候、みなほうはい共にも存たるものゝ候へは、人の心をはたかり、いままで参らす候、先むさし殿の御事につき、たう当家の御ないたん様くく候、たふんはいそきちうし申さんとおほせ候しんご処に、いまにはしめぬ小松殿御いけんには、むかしは源平とりのつはさのことくにして、源氏に事いてきぬれば、へいけ是をやわらけ、平家に事あれば、けんじこれをしつむ、たかひにわかやうありし時は、世のみたれもなかりしに、新院しんいん本院の御あらそひのち源平げんの中あしくなり(18ウ)、たうしはけんじほろひ、へいけはんじやうすといへ共、一方かけてはつはさもかけりかたし、ことによ

しつねはひやうしゆつをきはめ、ふりやくにたつしやなれば、国々のけんしとうしんせは、たうけもいかゝあるへき、ほろほしほろほざるゑは、たかひにむくひてせうれつなし、あたをあたにてかへせは、あたつきす、あたをおんにてかへせは、かへつてとくをうくるといへり、此よしつねを関東くわんとうにすへをき、ひかし三十三か国こく源氏のりやうちとし、にしをは平家のちきやうとし、もとのことく源平あひならんて、天下をしゆこし奉らは、たかひにゑいくはをなかくしそんにつたえん、一たんのとくにまよひ、後代のらんを(19才)しらざるは、ぐちのいたりなり、此事御同心なくは、是よりのち何事を重盛しげもりには御たんかうあるへからず、とおほせ候へは、清盛きよもりにもとおほしめしけるか、だいふのはからひたるへしとおほせられ候うへ、義経よしつねの御在所をたつね申され候、此事申さんために参りたるぞ、このうへは世にあらんは御へんのはからひよ」といふ。其とき弁慶うちうなつき、「ありかたしく、いつくにももつきものは一門なり、たれかかやうの御ないたんをはきかすへき、たとひよしつねをいたし、しざい流罪ざいにおよふとも、きうもんにおよふならば、此弁慶か身、石かねにてあらはこそ、ありのまゝに申へきに、まして我きみ三十三か国(19ウ)のぬしになりたまは、へんけいも四五か国はちきやうすへし、敵たかみかたの内にも、しんるいほとありかたき事はなし、あひかまいてよの人にかたりたまふな、御へんひとりに申さん」といへは、吉内よろこひ、くちのきゝたるはてうほうかな、くはふんのしよりやう給て、人々にうらやまれんこそうれしけれと思ひ、弁慶かひたいにかほをつきあはせ、「扱といつくそ」ととへは、「今は何をかつゝむへき、我君は日本国あめかしたのうちにまします」といふ。吉内大にはらをたて、「さては人をあやとるか」といふ。弁慶聞て、「いや、日本国とはそうみやうなり、其内いつれの国くに、いつれのさと、いかなる所といはんとすれば、御身はとしころ(20才)にもにす、心みしかき人や、くはしくかたらん」といへは、其時吉内左衛門きしよくをなをし、「其儀ならはしかるへし、たゞし御坊のうんつきなはかたらし、御へんのためをおもひてこそはらをもたつれ、われもひともよにありて源氏へ申まをへ事あらは、武藏殿むさしに

付て申へし、又平家へいに御ようの事あらは、吉内に承てひろう申へし」といふ。そのときへんけい、「それは申におよはす、何事もかたゝのやうなるよき人にちかつかねは、心ことはもやわらけなし、いまよりのちよろつ御いけんこそうれしかるへけれ」と、心よけにわらひければ、吉内いよゝよろこひ、「さてよしつねはたれ人のはくくみ奉り、いかなる所に(20ウ)御わたり候ぞ」といへは、弁慶かしらふりあげ、そらを見て、「あのくものしたにまします」といへは、吉内そふしてたてはらなるおのこにて、せんかたもなく無ねんに思ひ、「なにとてかさねて人をはてうらうするぞ」と、こらへかたなくいへは、弁慶聞て、「いや、その儀なし、すんとへはへんすんをこたへ、しやくをとへは尺をこたふといふみやうもくの有をしらすや、わたのが人すかさ人には、又わたのをますかし候はてあるへきか」とて、あざわらひければ、吉内無ねんなからますへきやうなければ、あとはつかしくかへりける。相国の御まへにては心よけにおうけを申、しゆはんをついやし、しこくてうらうせられ、誠まことにはうはいの(21オ)まへもめんほくなき次第なり。

きよもりきゝたまひ、「はしめよりさこそあらんとおもひつるぞ、をのれとなはかけられて出るほどのものか、いかてざる事あるへき、たゝゝいそきちうせよ」とおほせければ、大勢の中へうちかこみ、六条かはらへ出けるに、へんけいかさいこをみるときせんくんしゆする。弁慶をよく見せんとて、たかき所にしきかわしかせ、にしむきにひきすへたり。吉内てうろうせられたるかむねんきに、わざときりてをのそみ申、きりてになつてそいてたりける。其ときへんけい、四方をきつと見まはして申やう、「わか身ほうしにて、たかき所にのほれはかう座とおもふなり、御ふんはきりに来るか(21ウ)、近づきたるはたんなとみえたり、人のおほく見物すれば、ちやうしゆのことくなり、いかに吉内、ちやうしゆおそしとまつらんに、せつほう一座のへん」といふ。吉内聞て、「にくき御はうのきやうけんかな、たゝいまきられんするに念仏は申さすして、よしなきちのきゝ事や」といへは、弁慶いふやうは、「ねん

ふつをすゝむるほといとおしくは、よもきるまし」といひて、からくゝとわらふ。吉内かさねて申やう、「いまは何かはおかしかるへき、ひとによはけを見せしか為か、かうみやうもふかくもこんしやう一たんの事なり、たゝこいしきはうるのみやこにてとゝめたり、ひころのかまんをさしおき、いまをかきりの(22オ)事なれば、さいこのねんぶつ申させたまへ、うれうへき所にてうれえず、なかくへき所にてなげかさはるは、かへつてふかくなり、しやまん、かまんをすて、まことのみにいりたまへ」といへは、へんけいうちうなつき申けるは、「はつかしや、吉内殿聞給へ、しやうとくたいしいくさをすへしとみえたり、弁慶、法師なれ共しやけんにして、今も悪心をさしはさむ、御へんはそつちうをたいしいくさをすへしとみえたり、弁慶、法師なれ共しやけんにして、今も悪心をさしはさむ、御へんはそくたいなれとも、いんくはにくらからず、法師の身としてけうけをうけたる事、かへすゝめんほくなし、しよせんぜんちしきにたの(22ウ)むなり、せつせんとうじはきしんをらいしてはんちをうく、しやくそんはきつねをらいし師しやうとす、そくなり共たうりによるへし、三ひやうとうのくはんねんも、ふじやうなれはしんじんたうにもかなはず、きやう論ろんはなんきやうなり、そくあくふせんのきなれとも、じきにさいはうとたんするにはすきす。吉内申けるは、「それもねんぶつ申へし」といひければ、「いかに吉内殿、なをけふけし給へ、念仏ぶつは一ねんか、たりきか、一かふか、せんけか、何を申へきそ」とわらひけり。吉内はらをたて、「御房にわらはせん」といふまゝに、直垂ひたれの袖をとりてそはにつけ、はかまのすそをたかくとり、たちをするりとぬき、うしろにたち(23オ)まはりければ、へんけい見かへり、「あらおそろしのしろき御はかせや、かねかこほりか、もちたまふてのさそひへ候はん」とわらひければ、吉内しゝのはかみして、たちのつかくたけよと、もつてかゝりちやうとうつ。いつのひまにかはつしけん、まへなる石をそきつたりける。二のたちをうたんとするに、「いさやきられん」といふまゝに、すんとたつかとみえしか、さきへ四五間とひければ、人みなはつとちりけり。やかてあしをふみそろへはしりければ、「あわ弁慶かはな

れたるは」とて追かくる。こゝにあはれなるは、吉内か嫡子に、五郎兵衛とて、六十人ちからありと人にしられしものあり。心もかふなりとて、うしろのなほを(23ウ)ひかへさせけるか、あまり大事にかけ、はらまきの上おひにしかとしめつけけるか、俄にひつたてられ、つるにあしをふみためす、まくわひきにひきたふされて、をのつから河原の石くるまに乗てこけたるは、あら馬をつなきたるくいぬけて、なほにつきたるにことならず。五六町ひかれ、かうへみぢんにくたけて、生年廿七にてくさはのつゆときへたりけり。五郎兵衛もさばかりのちからなれば、此なほ手にもちたらんには、命はすてじものをと、人々申されける。弁慶は大みね八大こんかうりきしときねんして、さうの手をのへければ、さしもかたくいましめたるなわとも、すんくにきれにけり。弁慶河原より(24オ)石をとつて、大勢の中へうちければ、せいひやうのいる矢より人はおほくそんしけり。おりふしうちつゝき雨ふりければ、河水ふかく出たるにとひ入、平家の兵共くつはみをならへて川すそへまはり、岩にせかれて水のさかまく所、あるいはきしの柳かもとを、さしとりひきつめさんくゝいる。むさしは三四町かみのかは中に大せきのあるにのほりみれば、かたきははるかの下にあり。大おんあけて申やう、「弁慶はこれに候、御ようあらはこれへわたり候へ、殿はら」といひければ、大勢とつてかけけれ共、うちものにてはかなはず。又さんくゝに射けれ共、あかる矢をはくゝり、さがる矢をはおとりこえ、一つも身にはあ(24ウ)たらず。其時へんけいふやうは、「こゝにてじかいすへし、たゝし清盛へことつて申さん」といふほとに、矢をとゝめてきけは、「今度六はらへ参り三つのとくあり、一には師しやうのなをのかし申事、二には相国をはしめ御一もんいづれもみしり申事、三には弁慶かふるまひせうく御目につかけ候、御一門の人々よもうきはしてはましまさし、御ざうしと二人して、しのひくゝにきりとるへし、こんりんさいのたまもひろへはつくといふ事あり、平家のかたくもせんくゝにきりとらは、つきなん事はうたかひなし」といへは、兵共、「たゝ射とれやく」とさんくゝにいけれとも、此ほと御曹司に矢かへの法は(25オ)ならふつ、無しんにみを

つかへは、一すちも身にわあたらす。扱又みつの中へいり、かたきのありける川きしにあかりけれとも、人これをしらす。敵かたきのもつたるなきなたをうはひとり、「弁慶とはしらざるか、こゝまでよく来るに、もてなしなくてかなふまし」とて、大せいの中にわつて入、くもて、十もんしにきつてまはれば、さふらひとも申やう、「おに神とてもかたきはたゝ一人そや、うちとめよ」とて、返しあはする処ところに、俄にはかに河きりたつて東西とうさいをもしろす。たゝとも具そくにこそくはくうたれけり。

弁慶はつみつくりにてきらす、しはしやすみて北山へかへり、義経よじつねの御まへにかしこまり、「へんけい、ふしきのいのちを(25ウ)たすかり申、たゝいまこそ参りて候へ」と申せは、「よしつねも六てうかはらより、たゝいまかへりたる」とおほせらるゝ。弁慶、「御そら事や」と申ければ、「まことかいつはりか、なんぢかこゝをいてゝからいままでの事をかたらん、きゝ候へ、まつほうゆうのあんしつに行、具そく共みなあつけおきしはいかに、すゝかけはかりにて、けいしんのこしに追おひつき、りつしをきさんさせ、御へんなはをかけられ、六はらへ行ゆき、清盛もりにさんゝあつこうせし事な、其のち引たてんとすれとはたらかて、なはとりにさゝやきけるは何事そ、一もんのもの共か名をたつねけるよな、又せのおかもとへ吉内とやらんかさつしやうかまへて(26オ)来り、よしつねかありしよとひし事ともな、六条河原にてたちとりうしろにまはりし時、吉内きちないがくびをうちおとし、汝なんぢをつれてかへらんとおもひしが、なんちきらるへきまなこさしもなく、くひのもちやうこそはよかりつれ、其後一の太刀のはつしやうこそおもしろければ、二のたちをうつひまにとひ出、はしりたりしはみ事かな、九郎兵衛かなわとりして引ひきころされしふひんさよ、なは引きり、河にとひいり、大石のうへにて矢やちかひこそおもしろけれ、其後清盛もりのかたへことつてして、かはに入、かたきおほくうしなふ事こそむやくのつみつくりなれ、平家のさふらひとも、思ひきつてみえし程に、もし(26ウ)なかれ矢やにもやあたらんとおもひて、俄にかはきりのふりしは、よしつねかわさなり、すいふんのひしゆつなり」との

たまひて、からく〜とわらひ給へは、へんけいなみたをなかし申やう、「かけのことくあひそはせ給て、むさしめを御けいこありし事こそありかたけれ、たとひくにをへたて、大しやうをうけたまはり、かつせんをいたし候とも、御まへにてたゝかひ、君の御らんするよと存、いさましく候へし、返く〜かたしけなき御事かな」とて、かんないをなかせは、御ざうしなみたをおさへおほせられけるは、「かまだひやうへかうたれし時分に、よしつね今ほとせいしんしてあらは、なとまさきよをうたすへきそ（27才）、まさきよなからへ、弁慶と左右にたつるほとならば、へいけをほろほし、ほんいをとけん事やすかるへし」とて、御袖をかほにおしあてたまへは、弁慶いよく〜たのもしくそおもひける。

抑平家には弁慶をとりにかしつる事、清盛（もり）きゝたまひて、大きにさはかせたまひ、「よしつね一人ある時たに、心くしくおもひしに、あひおとらぬ武藏（さし）め一身して、兵法のしゆつをならひきはめ、かすみをたてゝ其身をかくし、此一もんをうかゝはんには、我々父子はまつろうきよすへきか」との給へは、小松殿おほせけるは、「へんけいかていしやうにひつたてられし時のつらましき眼（まな）さし、なはをもしめきり、われらとせうふせんと（27ウ）あんじゐたるものなり、それをみてこそ重盛（しげもり）、さふらひとも、ようしんせよとは申つれ、けつくは九郎もきたりてうかかひつらん、つち風立て、にはのしらすをふきまくりしはあやしかりき、此一門仏神にうんをまかせ、じひのせいいたうをとりおこなふ間、てんたうのかこあらん程は、義経（よしつね）か兵しゆつ無ようなり、れい儀をたゝし、しひの心ふかゝん（つゝ）は、すなはちひやうほうのあふきなるへし、弁慶かにけさまに、さふらひの五十人二十人そんじ申たるはものゝかすにあらす、かくまでふかくなるものともか、ぶようしんにては一人もいき残りたるこそふしきなれ」とのたまひて、御心にあたはぬ御けしきなれば、吉内は（28才）嫡子（ちやくし）五郎兵衛かしのぬのみならず、御まへあしくなりて、めんほくをうしなひけるを、にくまぬものそなかりける。

扱へんけいは北山にて御曹司にたつね申けるは、「なにとて六はらへ御出ありしとき、弁慶に御しらせありて、清盛父子をうちたまはさるぞ」と申せは、「されはこそ、内々そのためにわれも行けるに、清盛のゐたる座しきを見わたせば、一もんなみあたり、よきひまそと思ひ、うちものゝつかに手かけてものあひを見るに、れいの小松のおとゝ嫡座して、しやけんのつるきを、じひにうわの衣の袖にてつゝみ、まなこのそこにかとをたてゝ、義経がある所をふしんけに見けるか、しけもりがかうへのうへに(28ウ)、ともし火のやうなるもの一むらたちあかりて、その中によしつねかとりはきしんし奉るこんかふのせんしゆ、六七すんはかりにてあらはれ給ふ間、こゝにて清盛をほうちとる共、重盛うたるましきと思ひかへりたり、其うへ平家をほろほさは、重盛をまつうつてこそほんまふなれ、こまつはせいしんにて、せいたうをたゝしくす、此よしつねは悪人にて、世けんをうかかふゆへに、仏神、重盛をしゆごしたまひ、義経をはなしたまふとおほへ、あさましきぞ」と宣へは、弁慶承て、「平家もうんつきなは、こ松もいつまてなからふへき」とぞ申ける。

さるほどに弁慶をめしくして、ときくらくちうへ出たまひ、日くれければ(29オ)みや、てらなとさんけいしたまふに、へんけいに行あふほとものものをけたをし、ふみたをしする事たひくなれば、をのつから京中しづかならす。此事清盛きゝ給て、「義経も武藏めもみなおなしほんふそかし、たとひ人おほくそんする共、うち得ぬ事あるへきか、かんのかうその三しやくのけんも、うんつきぬれはいらす、此ころ当家のくはほうさかんにして、なんそうんつきたる義朝が子ともほろほさるへき、此ものとも夜ことに京中にてあくきやうするときく、いかにもしてうつてすてよ、九郎はこおとこにて、いろしろし、へんけいはみな見しるらん、いろ黒く、たけたかき法師そや、うちとりくんこうを(29ウ)のぞめ」とおほせければ、みやも中にていろのしろき小男と、大なる法師をは、みあひ次第にきりすつるほとに、いよくらくちうきはかしくなる。此事よしつね聞給て、「とかなきものをころさせんより、先東国

にくたり、都をあんおんにすへし」とて、おくへくたりたまふ。弁慶はいつもの具そく共とりつけ、「たゞいま御さうし御くたりにて、弁慶も御とも申なり、うちとめて、くんごうのそめ」とよはくりけれど、いてあふもの一人もなかりけり。其時へんけい申やう、「三年かうちにきつてのほり、おこる平止をせめしたかへ、らくちうをあんとなすへし」といひすて、くはんとうへこそくたらられけれ(30才)。

(完)

本稿に記すところは、昭和五十一年度文部省科学研究費補助金(一般研究D)による調査の一部である。

訂正(巻上)

- 6ウ 大納言なごんとの
8才 へんけいほどのものが
11才 ふるくなり候は、
12ウ 異儀いぎ
13才 頼政よりまさ
13ウ かなぶちとりそへ、かの四しやく六すんの
21ウ しつかに物よくさしかため
22ウ 重盛しげもり
22ウ ほくろく道に下けり
29才 さては御へんが、かきたるか
30ウ いころさるゝ。さる程に